◆ 書 評

ペルー近過去を照らす書籍二題

伊 高 浩 昭

2020年から21年にかけて日本で刊行されたペルーに関する興味深い2冊の本を読んだ。メキシコ駐在大使などを歴任した寺田輝介元外交官に3人の研究者が質問し聞き書きする『外交回想録――竹下外交・ペルー日本大使公邸占拠事件・朝鮮半島問題』（吉田書店）と、ルルヒオ・ガビラン著『ある無名兵士の変遷――ゲリラ兵、軍人、修道士、そして人類学者へ』（黒宮亜紀訳、現代企画室）。いずれもノンフィクションで、後者は自伝である。

ペルー独立200周年の2021年7月、農村小学校教師だったペドロ・カスティージョを大統領とする新政権が発足した。1968年から75年までフアン・ベラスコ将軍が率いた「軍事革命政権」以来、46年ぶり[1]に登場した「左翼政権」と見なされ、農村部や都市周辺の貧困大衆層から変革への熱い期待が懸けられている。

取り上げる2冊に記された出来事はいずれも、ペルー社会の地殻変動に根差している。すなわち新旧左翼両政権の間の半世紀近い歳月に起きた、内陸奥地から海岸地帯への貧困層の大移動による「住民生態系」の激変によって動態化した、海岸地帯の富裕層支配への貧困層の反逆という問題に関わっている。背景の状況を添えて、両書を紹介したい。

▼日本政府のフジモリ贔屓

『外交回想録』は、寺田の職歴に沿った4章で構成される。うち第2章には、ペルー駐在日本大使公邸占拠事件（1996年12月～97年4月）の前段階の日秘関係が記され、続く第3章の多くは同事件の推移に割かれている。この本を取り上げたのは無論、公邸事件の発生から決着までの経過と、日本政府の言動が細かく綴られているからだ。

事件当時、メキシコ駐在大使だった寺田は、第2章に記されている外務省中南米局長期の92年に国賓として来日したアルベルト・フジモリ秘大統領と知己になっていた。そのことや、西英仏3語を自由に操ることから、公邸事件に対処するため、リマに急遽派遣された。

ここでいったん寺田の局長時代に触れる。フジモリは1990年の大統領選挙決選で作家マリオ・バルガス＝ジョサに逆転勝ちし、同年7月政権に就き、92年3月に日本を公式訪問する。寺田は接伴員としてフジモリの世話をした。

当時の宮澤喜一首相は、初の日系人大統領フジモリに対し「非常に関心があり、同情的で、言

われなくともフジモリを助けてやれ」と寺田に指示する（p. 123）。寺田は日本国内に「官民を挙げて助けてやる必要がある。そういう国民感情が国内に広がっていることを、主管局長として感じ」、それを「フジモリ・フィーバー」と表現している（p. 123）。

首相以下、フジモリを「厚遇し、十分な経済援助を表明」、フジモリは「満足して帰られた」。重責を果たした寺田は、そう語る（p. 124）。

ところがフジモリは帰国して間もない4月5日、軍・警察と連繋して「お手盛りクーデター」を打ち、憲法停止、国会解散などを断行、民軍強権体制を敷く。その上で、新自由主義経済政策を遂行して超インフレを抑え込み、軍・警察、農村自警団を動員して「センデロ・ルミノソ」（SL、輝く道）と、「トゥパック・アマルー革命運動」（MRTA）の両ゲリラ組織の最高指導部を逮捕、組織を壊滅状態に追い込んでゆく。

92年4月の「自作自演クーデター」には、国際社会から囂々たる非難が巻き起こった。ところが首相の宮澤は対秘経済援助見直しの可能性を問われて、「考えていない」と答えた（p. 128）。寺田は、「自民党を中心とする日本の政治家は、大統領を追い詰めるようなことをしてはならぬとの意見を表明していました。それだけ日本の政治家には、フジモリへの思い入れがあった」と指摘する（p. 130）。

以上のような日本政府の有り様と、そこから生じた油断が、公邸事件の伏線としてあったと評者は指摘せざるを得ない。

▼蜜月の背景に「日米外交分担」

武力決着に終わった公邸事件の推移は周知の通りだ。公邸内に残されていた人質は73＋1人だった。ネストル・セルパ以下14人のMRTAコマンドの公邸占拠の狙いは一に、人質と引き換えに約370人の仲間を獄中から解放することだった。

寺田は、仲間解放をフジモリに呑ませるには、「フジモリに一番関係の深い日本の大使公邸を狙うのがよいというのは、彼らの戦略からすると当然の帰結」と明言する（p. 311）。日本と「フジモリのペルー」の蜜月時代の基盤をつくった宮澤政権期に、その基盤づくりに貢献した寺田は、公邸事件が起きた理由に人一倍思い当たる立場にあったと言ってよい。

評者が通信社のリオデジャネイロ支局にいて、ペルーにしばしば出張取材していたころの1989年末、政治家としては無名のフジモリは大統領選挙に出馬した。フジモリは大使公邸を訪ね、当時の妹尾正毅大使に「私が大統領になったら、日本はペルーを援助してくれるか」と訊いた。大使は内心、「とんでもない〈天一坊〉が現れたものだ」と呆れ返ったと聞く。

その人物が、本命視されていた保守勢力の候補バルガス＝ジョサを蹴落として政権を獲った。そして外国で初めての日系人大統領ということ以外に見つからない理由で、日本政府と緊密になり、その結果、公邸事件が起きた。

ここで1980年代末から90年代初頭にかけての日本のラテンアメリカ外交を振り返ると、公邸事件と無関係でない「前史」があったことが浮かび上がる。90年2月のニカラグア大統領選挙時、同国駐在の日本大使は前年から米国やニカラグアの保守勢力と連繋して奔走、野党候補ビオレタ・チャモロを勝利に導くのに貢献した。

ジョージ・ブッシュ（父）大統領期にあった米政府と日本政府の間に、そのころ「部分的分業分担」が始まった。宮澤政権はブッシュ政権から「フジモリのペルーは任せる」とのお墨付きをもらっていたと、評者はフジモリ政権筋から証言を得た。寺田がそれを知らなかったとは思えない。この点に関しては、寺田に守秘義務が作動したのかもしれない。

また、評者はフジモリ側近筋から、大統領は訪日中、瀬戸内海上空で「このままでは終わらない。見ていてください」と、日本側にクーデター決行の可能性を示唆したと聞いた。この発言が接伴員だった寺田や、寺田から注進される立場にあった宮澤に届かなかったはずはない。評者は、フジモリのクーデターは日本政府にとって織り込み済みだったのではないかと捉えている。

21世紀に入ってからの例を挙げれば、日本は、バラク・オバマ元大統領が国交再開に踏み切ったキューバと米国の関係がトランプ前政権下で冷却化した後も、今日まで良好な対玖関係を維持し、援助を続けている。これは北朝鮮による拉致事件を抱える日本政府が、緊密な対朝関係を持つキューバとの関係を重視しているからであり、そんな日本の立場を米国は認めている。これも日米間の一種の「外交分業」と言えなくもない。

公邸事件には重要な後日談がある。カスティージョ政権は、フジモリには新たに裁かれるべき追加の罪状があるとして、身柄引き渡しに応じたチリ政府に対し、追加許可を（2021年）10月に要請した。

日本大使館書記官として人質となった小倉英敬は、著書『封殺された対話』などで、公邸に突入した特殊部隊がMRTAゲリラ3人を生きながら捕らえるのを目撃した、と証言してきた。その3人は処刑された。寺田は、小倉の目撃談を正しいのではないかと見ている（p. 336）。チリ政府が許可すれば、「3人処刑」の事実が法廷で解明されることになるかもしれない。

また寺田によれば、フジモリは「自分は100パーセント、ペルー人である」と明言している（p. 191）。APECを利用して日本に亡命したフジモリに対する日本政府の見解とは矛盾するようだが、本書刊行時（2020年10月）に至っても1993年時点のフジモリ発言を繰り返す意図はどこにあるのか。日本政府が望んでいた「平和決着」にならなかったこととの〈帳尻合わせ〉とも受け取れるだろう。寺田は、この『外交回想録』を聞き書きに応じるのではなく、自らの筆で書くべきではなかったか。

▼生死の境で鍛錬された少年戦士

『ある無名兵士の変遷』は、MRTAと並ぶ、もう一つのゲリラ組織「センデロ・ルミノソ」（SL）に関係する。南米大陸北西部での独立戦争期、独立軍がスペイン植民地軍に対する勝利を決定づけたのは、1824年の「アヤクーチョの戦い」だった。その古戦場のあるペルー中東部のアヤクーチョ州が、この本の主な舞台だ。

SLは、州都アヤクーチョにある国立サン・クリストーバル・デ・ウアマンガ大学の哲学教授だったアビマエル・グスマンを最高指導者として、MRTAと同じく1980年に公然活動を開始した。MRTAの活動が都市部で目立ったのに対し、SLは同州および周辺諸州のアンデス高地や渓谷地帯の農村部での活動が際立っていた。

グスマンは、「革命的暴力」と呼ぶ殺戮や破壊を戦法とする「人民戦争」を展開、それに酔い

痴れているように見受けられた。自分を頂点とするカルト集団のような組織をつくり、主として農村から徴兵した青少年をゲリラとし、部隊や突撃コマンドを編成して軍・警察、地方行政機関や、SLに従わずに自警団を組織した農民らを襲撃していた。

1971年アヤクーチョ州の寒村に生を受けた著者ルルヒオ・ガビランは、貧農家庭の少年の多くがそうであったようにSLに徴募された。12歳だった。グスマンを「ゴンサロ大統領」と呼ばされ、崇拝するよう叩き込まれる。少女のゲリラも珍しくなかった。

SLに入隊して3年間、ルルヒオ少年は生死の境で、待ち伏せ、襲撃、戦闘、逃走、食糧調達に明け暮れる。挙げ句の果てに陸軍部隊の捕虜となる。だが殺されずに今度は陸軍の少年兵にされ、古巣SLと、その支援者を敵として討伐戦に駆り出される。

少年はみな多感だ。それに加えてルルヒオは現実的ないし実践的、実利的だが、同時に懐疑心が強かったと、行間から推測される。「心ある上官」に恵まれたこともあって殺されず、死なず、目をかけられた。生と死が背中合わせの十数年、少年はしたたかな生き方を身につけたはずだ。

1990年代半ば、ルルヒオはカトリック修道僧の道を選ぶ。当初、イエズス会入りを勧められたが、童貞でなければ入会できないという掟があった。同会幹部は、SLゲリラに少女がいたことや、捕虜になった少女ゲリラを陸軍兵士らが「慰安婦」にしていた事実を把握していた。このためルルヒオはイエズス会には入れなかった。

だがルルヒオは、自分が少女たちと関係したか否かを本書には一言も語っていない。ゲリラや陸軍兵士として敵を殺したかどうかも明かしていない。繰り返すが、少年は極限状況で、しぶとく賢い処世術を学んだに違いない。

果たして神の僕(しもべ)も、ルルヒオの道ではなかった。ウアマンガ大学で修めた人類学こそが我が道だと悟る。奨学金を得てメキシコの大学に留学し、博士号を取得。50歳になった2021年現在、母校ウアマンガ大学の講師を務めている。

来し方を振り返り、ゲリラとして、また兵士として戦い駆け巡った山野を再び歩き、この自伝を世に出した。「起承転結」が明確に区切られた劇的な半生の記録だ。

▼「軍事革命」の帰結としてのカスティージョ政権

2021年9月11日。この日は、サルバドール・アジェンデ大統領が命を絶った1973年のチリ軍事クーデターの48回目の記念日だった。3200人ものチリ人らが殺されることになるピノチェー軍政の始まった日である。

その日はまた、3000人近い人々の命を奪った、米国中枢部で同時的に発生したテロリズム事件の20周年記念日でもあった。

この忌まわしくも運命的な日に、1992年以来、終身刑を科せられ、29年服役していたアビマエル・グスマンが獄中で病死した。86歳だった。グスマンは、SLに理解を示すシンパたちの多い「自由ペルー」(PL) 党を政権党とするカスティージョ政権の最初の40日間の施政を獄中から眺めながら死んでいった。ルルヒオ・ガビランは、かつての「ゴンサロ大統領」の死を、どう受け止めたのだろうか。

グスマンはまた、山間部や渓谷地帯にSL残党が活動し、リマなど都市部ではグスマン釈放運動

が展開されていたことも認識して死んだはずだ。因みに、MRTAの最高指導者だったビクトル・ポライは2023年3月に刑期を終える。

ベラスコ軍政の帰結がカスティージョ政権の登場だ、と評者は見る。SLとMRTAは社会変革の主体にはなれなかったが、政治変革を促す劇薬の役割を辛くも担ったとは言えるかもしれない。

PLは国会で第1党だが、連立党を加えても少数派にとどまる。党首のブラディーミル・セローン書記長は、SLの勢力が強かったフニン州の知事だったが、汚職で退陣に追い込まれ、刑事裁判で有罪になり、被選挙権を剥奪された。そのため代理候補として、「農村民族主義者」とでも呼ぶべき、「農村の発展」を目指す現実的改革派のカスティージョを出馬させ、政権を勝ち取った。

セローンは、側近のギド・ベジード首相らを政権中枢に送り込む。だがSLシンパと糾弾された同首相と他の閣僚はともども次々に辞任や更迭に追い込まれた。カスティージョは施政3ヶ月目の21年10月には意識的に「セローン離れ」に努めるようになり、国会内の支持基盤を中道諸党や穏健保守陣営に拡げようと懸命になっている[2]。

カスティージョが同月公表した自前の政策は「第2次農地改革」だった。半世紀前のベラスコ軍政期の大規模な農地改革に次ぐものとの位置づけだが、実態は農地の分配ではなく、零細農民への生産力強化支援計画である。

カスティージョがベラスコ政治を一つの模範にしているのは確かだろう。だが現代的な模範は、隣国ボリビアのエボ・モラレス大統領が先住民復権を実現した「多民族多文化国家」であり、そのペルー版の建設とみられる。

だが、それには資源国有化による民族主義経済体制の確立を含む大規模な変革が必要であり、国会による憲法大幅改正、もしくは制憲議会を開設しての新憲法制定が必須条件となる。国会の議席配分からすれば、それは見果てぬ夢だ。

こうなるとガビランの手記に感じられるような実践主義、実利主義にカスティージョが染まってゆくかもしれない。5年間の政権を全うしようと望めば、そうなる公算は大きい。しかし、その場合も、改革を志しながら骨抜きにされたオヤンタ・ウマーラ大統領ほど惨めな結末にはならないのではないか。

カスティージョは青少年期、SLと戦う農村自警団員だった。ほぼ同年輩のガビランは自警団相手に戦った。その自伝が、カスティージョ政権下のペルーを理解するのに役立つのは疑いない。残念なのは訳文。多くの修正と深い推敲が必要だろう。

〈註〉

1　1985年から90年まで政権を担ったアラン・ガルシアは当時、左翼と見なされ、貧困層から左翼的改革を期待されていた。だが汚職政治に明け暮れ、ゲリラ活動を激化させ、経済を破綻させた「見かけ倒しの左翼」だった。甘い生活を好むサロン左翼にすぎなかった。ガルシアは今世紀になって保守陣営の大統領として返り咲いたが、またぞろ汚職三昧だった。任期が切れた後、腐敗を追及する当局に自邸に踏み込まれ、逮捕直前の2019年4月17日拳銃自殺を遂げた。

2　カスティージョは2022年6月、PLを離脱した。

寺田輝介、2020、『外交回想録――竹下外交・ペルー日本大使公邸占拠事件・朝鮮半島問題』、吉田書店（服部龍二、若月秀和、庄司貴由 共編）

ガビラン，ルルヒオ、2021、『ある無名兵士の変遷――ゲリラ兵、軍人、修道士、そして人類学者へ』インディアス群書15巻、黒宮亜紀訳、現代企画室

（原書）Gavilán S., Lurgio. 2017. *Memorias de un soldado desconocido*, segunda edición revisada y aumentada, Lima: Instituto de Estudios Peruanos

（いだか　ひろあき　本研究所学外所員、ジャーナリスト）